

総説

ワークショップ：疫学をどう使う？

蒔田浩平

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 獣医疫学教授

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582

Tel & Fax: 011-388-4761; Email: kmakita@rakuno.ac.jp

【要約】

畜産現場で疫学を使うことについて、特に実現への課題と解決策の観点から、ワークショップ形式で掘り下げる。方法としては、ホワイトボードを用いていくつかの論点について、会場の参加者および演者と共に、インタラクティブに意見を出し合い、KJ法を用いて出された意見を整理していく。

「疫学をどう使うか」については、家畜感染症による被害実態の定量化、疾病のリスク因子の検討、感染症対策効果予測による対策の選択あるいは優先順位付け、刻々と変化する感染症学的状況に則した最善策の検討、疫学リテラシーによる生産者への行動変容の呼び掛けあるいは行政への要望の投げ掛け、および対策の効果の検証などが挙げられるであろう。「実現への課題」については、国家として機能するために獣医師に不可欠な疫学リテラシーを持たせるに十分でない大学および地方自治体の組織体制、不十分な学び直しの機会、産業界の重要性の不理解、多忙な業務に加えて高い専門性の疫学を習得する困難さなどが考えられる。解決策としては、疫学の普及を図る取り組み、疫学を請け負うベンチャー企業体の萌芽などポジティブな変化が見られるが、ニーズを感じている多くのステークホルダーによる革命への後押しが必要であると考えられる。本ワークショップでは、参加者の創造的かつ建設的な意見に期待したい。

キーワード：疫学、定量化、リテラシー、行動変容、KJ法

1. はじめに

疫学は集団における疾病の分布と規定因子の把握により、効率的に疾病を予防、あるいは減らすための学問である。わが国は欧米諸国と比較すると疫学の普及が大幅に遅れたが、筆者が知る限り、この20年で著しい成長を遂げた。しかしながら大学における教育コアカリキュラムにも疫学が独立科目として採択されているものの、疫学を専門とする研究室の開設は多くの大学で実現に至っていない。それどころか、疫学を独立科目として開講している大学は限られ

ている。

畜産現場では2010年に口蹄疫が発生して以降も重要家畜伝染病の発生が続発し、毎年多くの家畜が殺処分されている。国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究部門などでは疫学体制が充実してきており、国家レベルでの施策の検討に疫学が重要な役割を担っている。臨床現場においては、疫学の応用事例が見られているが、多くの臨床獣医師からは必要性が認識されていても、日々の業務の中での応用は様々な課題があり進んでいないのが現状である。ここでは、ワークショップという方法論を用いて、「疫学をどう使う」かについて論点を整理する。

投稿：2022年10月5日

受理：2022年10月5日

2. 方法

本ワークショップでは、アブダクションと呼ばれる哲学に基づく KJ 法を用いる。KJ 法は参加者の自由な発想のもと、価値観や概念の整理や、問題解決に用いられる。具体的には、自由に出された意見を視覚的に配置し、それら意見をカテゴリ化するなどして一般性を理解する、あるいは問題解決には有効性と即効性のポジショニングなどを用いて対策の優先順位を決めることにも応用できる。

このワークショップでは、40 分間の限られた時間の中で、参加者から自由に意見を求めつつ、ファシリテーターが疫学専門家としての意見を加えながら意見を整理していく方法を取る。

3. 期待されるアウトカム

「疫学をどう使うか」については、家畜感染症による被害実態の定量化、疾病のリスク因子

の検討、感染症対策効果予測による対策の選択あるいは優先順位付け、刻々と変化する感染症学的状況に則した最善策の検討、疫学リテラシーによる生産者への行動変容の呼び掛けあるいは行政への要望の投げ掛け、および対策の効果の検証などが挙げられるであろう。

「実現への課題」については、国家として機能するために獣医師に不可欠な疫学リテラシーを持たせるに十分でない大学および地方自治体の組織体制、不十分な学び直しの機会、産業界の重要性の不理解、多忙な業務に加えて高い専門性の疫学を習得する困難さなどが考えられる。

解決策としては、疫学の普及を図る取り組み、疫学を請け負うベンチャー企業体の萌芽などポジティブな変化が見られるが、ニーズを感じている多くのステークホルダーによる革命への後押しが必要であると考えられる。

本ワークショップでは、参加者の創造的かつ建設的な意見に期待したい。

Workshop: how can we use epidemiology?

Kohei Makita

Professor of Veterinary Epidemiology, Department of Veterinary Epidemiology,
School of Veterinary Epidemiology, Rakuno Gakuen University
582 Bunkyo-dai-Midorimachi, Ebetsu, Japan
Tel & Fax: 011-388-4761; Email: kmakita@rakuno.ac.jp

[Abstract]

This workshop will consider about the application of epidemiology in the field of livestock farming, particularly in terms of the challenges and solutions. In the session, using a white board, a facilitator, together with participants and presenters, will express ideas on several discussing points in an interactive manner, and arrange them using KJ method.

Epidemiology may be applied for the quantification of burden of animal infectious diseases, consideration of risk factors of diseases, selection or prioritization of intervention based on the prediction of the effect of a disease control program, consideration of best-bet control option reflecting the dramatically changing infectious disease situation, addressing the necessity of behavioral change to farmers or proposing a policy to the authority through epidemiological literacy, and evaluation of control measures taken. The challenges can include insufficient structures of universities and local administrations for allowing veterinarians to acquire enough epidemiological literacy which is essential for a nation to function, insufficient opportunity of recurrent education, poor understanding of the importance among industry, and difficulty of acquiring epidemiological skills at high expertise under busy working schedule. As solutions, several positive changes can be observed, such as activities facilitating dissemination of epidemiology, and emergence of venture companies undertaking epidemiology. However, supports are needed for realizing the revolution in epidemiology, from the stakeholders that are in need. Productive and constructive ideas by the participants are expected in the workshop.

Keywords: epidemiology, quantification, literacy, behavior change, KJ method